

本願の教学

——入出二門の源泉——

安 田 理 深

「世親菩薩は大乗修多羅、眞実功德によって、一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり。無碍の光明は大慈悲なり、この光明はすなわち諸仏の智なり。」何回も、初めからこの話ばかりで、一向、前にすすまないようですけれども、講義というものは、早やとくに済んでしまった、もうあんまり話し過ぎてしまったという意味もあるわけですわね。なんべんも同じところ繰り返しても講義は終わったと言えないこともないですけれども、しかし終わったようであるけれども、なんか終わったと思うとさらにですね、間隙になることが多すぎる。というのはやっぱり、ここに全体があるのではないか、一心ということですね。一心帰命尽十方不可思議光如来というところに、全体があるのでないかと思うんです。この僅かな言葉ですけれども。全体というのは、どういうものかということです、本願成就の文、それが全体なんです。

本願成就の文の、お心というものがですね、ここの三行六句にあらわされている。けれども、三行六句だけれど一番最後の二行は註釈なんです。「無碍の光明は大慈悲なり、この光明すなわち諸仏の智なり。」智慧と慈悲ですね。光というものは智慧と慈悲という意味もあらわしているんだ、こういうことは註釈です。だから初めの二行ですね、二

行四句、そこがもとの「願生偈」でいえば、はじめの一行ですね。「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」というのはじめの四句ですね。願生偈の、四句一行、四句でもって一願というものがあらわされている。願生偈の第一願ですね、そこがここに出てくるわけです。「願生偈」では四句に述べてある、それがここでは五句で出てくるわけですね。これは何べんも言うように、形式的には第一願は序分なんですけれども、観彼世界相というところから本文でしょう。しかし、文章の形は、あの序分ですけれども、内容からいうと本文なんです。むしろ「一心帰命尽十方無碍光如来」というところに「願生偈」全体がある。これが『大無量寿経』においてはですね、本願成就の文というものに当たっているわけですね。天親菩薩が体験された本願成就の文だ。つまり一心というのは本願成就の一心、如来の本願が天親菩薩に成就したということですね。如来の本願が、天親菩薩という一人の行者の上に現成したと、こういう意味を表白してあるんですね。

これは長い話になりますけれども、この『大無量寿経』の教学というものは、どこで成り立つかといえ、一応本願の上で成り立っているようにだけでも、それが一つの教えとなってくるのはですね、本願にちがいないが、本願の教学ですね。『大無量寿経』は本願を説いてある、したがって『大無量寿経』の教学はこの、本願の教学というものをどこに見つけるかということ。本願には、本願成就、本願が成就したという、そういう一つの事実ですね、本願というものは無限に広く深いものですけれども、無限に広く、深い純粹な願心ですね。願というものがですね、それが衆生の上に、衆生を超えたような願が衆生の上に成就した。そこに衆生ということはつまり自覚になる。願は人間を超えておられるけれども人間を超えた願を人間が自覚する、というところに人間が救われていく。だから教学というものはそういうところに、根がある。真宗教学というものがね。教学というものを離れたら浄土真宗というものはない。教学を離れて浄土真宗はどこにもない。

親鸞教学という具合に普通言われていますけれども、やっぱり法然、親鸞という法然上人ですね。法然上人は浄土

宗と言われて、親鸞は浄土真宗と言われたんですけども、二つあるというだけども、法然上人の浄土宗を浄土真宗として完成すると、こういうのが親鸞ですね、親鸞教学です。法然上人までは、浄土宗というものがなかったんですね。あるのは聖道の宗学。浄土宗というのはなかった。浄土宗はあそこで独立してきた。それは何故かという、選択本願という言葉、スローガンですね。選択本願という、それを説いたのが『大無量寿経』ですね。選択本願というのは具体的には念仏です。選択本願ということによってですね、はじめてそういうものが独立してきた。聖道の門から抜け出して。それまでは聖道の門の中に閉じ込められていた。それが独立してきた。独立したけれどどうもそこにやっぱり完成しておらん。つまり、よくわからのやね、選択本願の思し召しというものがですね。だからして、ただ選択本願とだけ言われたんですけども、選択本願というものが具体的にわからない。法然上人の体験は別ですよ。体験というものは別ですけども、体験なら自分自身のことなんです。自分が体験するんだ。教学というのは公のものなんです。そういうことになるけども法然上人ではですね、どうも教学は完成しとらん。そういうものがあると思いますね。どうも完成しとらん。独立したけど、独立した浄土宗の教学というのは未完成だ。完成するということが、親鸞の事業だ。法然上人をやめて、法然上人の教えをやめて、親鸞の教えを主張したんじゃない。法然上人の教えを完成する、こういう為に『教行信証』というものを作られた。

選択本願と言うんだからやっぱり法然上人の立場は本願だ。本願によって、念仏というものには本願がある。念仏というものは、ただ我々の努力というんじゃない。あらゆる人間の努力の中の一つとして念仏があるんじゃない。実は本願なんだからね。本願という行なんだ。努力によって、念仏の努力によって我々が往生をとげるってもんじゃなしに、そうじゃなしに、念仏というものが我々の往生を遂げしめる。念仏というのは我々の努力がいらないのが念仏なんです。念仏を努力に言えばですね、やっぱり聖道と同じ教学になる。そういうものがいらんようになるのが本願というものです。我々の問題はもう本願で解決されている。だから念仏で救われるのではなく、念仏が救い

なんだ。念仏を手段として救われるのではない、念仏を称えるという努力によって我々が救われるのではない。念仏は努力無用というものなんだ。我々が行ずるんでない、もう本願自身が行じているのが念仏なんだ。こういうようなことは、どうも法然上人では、教学として未完成、こういうことでしよう。法然上人は体験をいう。もう法然上人は念仏。非常に大事なものは、本願成就というのはどういうことかということ、本願の回向成就ということ。法然上人でも不回向ということ言われた。まあ色々言われたけれど、法然上人の念仏についての解釈の中に、不回向と。念仏以外の行と区別する一点はどこにあるかというと不回向ということだ。これが非常に大きな意義をもっている。ほかにもあるんですけども、しかし回向不回向対ということですね。念仏以外の行というのは、回向を必要とする。念仏以外の行は回向をまっしてはじめて往生の行になる。念仏は回向する必要がある。その念仏以外の行は救いにするんだと。ところが、念仏はそうじゃない、するのではない、それ自身がもう救いなんだ。念仏で救われるんじゃない、念仏に救われるんだ。こういうようなことはですね、どうも法然上人では、教学としてははっきりしとらん。

仏法というものを民衆に開放されたのが法然上人です。つまり法然上人からはじめて民衆の仏法というものが生まれてきた。民衆の仏法ということがですね、まあ、西洋の言葉で言えばプロテスタンティズムというもの。キリスト教の中でルーテルというような人がそういう事業をやったんですけども、カソリックと区別してですね、ローマのカソリックということと区別してプロテスタントと。新教、新しいキリスト教という意味ですね。それがつまりルーテルの事業です。ところが日本で、やっぱりそういうような宗教改革ですね、プロテスタントというのはちょっと外国語ですけども、宗教改革という意味ですね。宗教改革という意義が浄土宗を聞くとというような意味だ。まあキリスト教を例に言えば、聖道門というのはカソリックや。それが独立してきたんだね。宗教が改革された。そういうような意義をね、法然上人の事業はもっておる。なんかやはり仏教にはちがいないけれどもですね、やはり聖道門と

いうものは人間から、人間を立場としてその上に仏道というものが成就する。つまり人間が仏に成ろう、こういうのです。それが聖道門、人間というものを捨てないんだね。人間を立場としてその上に仏道を成就する。人間が仏に成ろうと思う。ところが法然上人は、そうじゃないんだという。仏が人間になるんだ。仏が人間を仏にするんだ。大きな変革ですわ、これはね。人間の努力では、人間は救われん。のみならず、人間の努力は必要ない。こういう点、そういう意味をあらわすのが念仏というもの。はじめてそれでですね、人間の努力ならできる人もあるし、できない人もある。やっぱりそうなるというのと、頭のいい人とか、修行した人とか、つまり、偉い人だね、優れた人の仏法ということになる。聖道門がだめだというのではない。聖道門は立派なんだ。立派だけれど一人です。曹洞宗というけれど道元禪師、誰も道元禪師みたになれん。道元禪師がだめだというのではない。道元禪師が優れておるから、すぐれているのは道元禪師一人だ。弘法大師でもそうです。なにもつまらんというのではない。ただ、誰でもできない。その人個人の仏法です。やっぱりそこに仏法をね、万人に開放しなければならぬ。仏道を。そうでしょう。そういう事業がやっぱり一つの宗教改革を生んでくるのです。偉い人の専門にされておる。専有物だ。だからして一般の民衆というものは、宗教の外に、埒外にほったらかされておる。その一般の民衆の中に仏法を開放しなければならぬ。こういう事業をはじめて道を開かれたのが法然上人です。非常に大きな事業ですな、これはね。

それだからやっぱりその公平な目をもってみると、外国に優れたキリスト教の神学者がいるんだけど、まだ『教行信証』というものは翻訳されていないですけれど、しかしとにかく法然、親鸞の思想というのはかなり外国にも知られているんですわ。なんでああいいう具合に知ったのか、わからんけれど、法然上人の御伝というものがありますね。法然上人の有名な伝記ですわ。あれが、英語に翻訳されておる。それが非常に優れた翻訳ということを前から聞いてるんですがね。ああいいうものを通して、やっぱり法然、親鸞の思想が外国にも知られている。別に法然上人の『選択集』とか、こういうようなものはまだ翻訳されていない。それから、親鸞聖人の『教行信証』というものはようやく

この間、この間と言っても一〇年になりますかね。そんなものをまだ外国の人は読んでいないだろうと思います。けれど、たぶん法然上人の伝記を通してですね、浄土宗は非常に大事にされている。ああいうものがやっぱり英訳されている。一八願というようなものがちゃんと知られている。細かいことは別として、かなりおおづかみだけれど、法然、親鸞の仏教の歴史における事業というものがですね、外国には知られとるんです。それで、そういうところから法然、親鸞の事業というものをみれば、異教的プロテスタンティズム、異教的宗教改革ですね。仏教だから異教というわけだ。異教の中にあらわれた一つの宗教改革。ちょうどルーテルの事業が東洋に起っている。ルーテルのやった事業が、仏教の中に起っている。実にこれは不思議な現象だということを外国人が認めておるんだ。こっちの方が勝手に、手前勝手なことを言ってるんじゃない。外国人が認めておる、キリスト教の人がね。実にこういうことは不思議だと。キリスト教が感化したりして親鸞が生まれたというわけじゃないけれども、仏教の中にそういうことが起ったということは、実にこれ不思議だと、そういうようなことを言っています。

法然の思想というもので一応仏教というものが民衆のものになったけれども、しかしながら親鸞はさらに純化した。法然上人にはまだいらぬもの、夾雑物があつた。それを徹底的に取り払つてですね、念仏を信ずるという一点に結集、結晶した。あとのものを全部を捨てちゃつた。それほど純化した。宗教改革に、ドイツはルーテルが代表と思えますけれども、フランスではカルビンというのがありますけれども、ルーテルの宗教改革ではですね、プロテスタントの精神、スローガンをね、ただ信仰のみということで結集する。これがプロテスタントのつまりスローガンだ。ただ信仰のみと。ちょうどそういうことを親鸞は言われたわけだね。ただ信仰にあり、それは専修念仏ですわね。一心一向という一心一向の信仰、それ以外のものは無用だ。人間の努力なんかというものは救いの条件じゃない。ただ、頼むということだけ我々にあるのだと。まあこういう具合にしたのませ、たのむ。たのませるのが念仏、たのむのが信心なんだ。本願が我々に呼びかけて、我をたのませて、そしてそこでたのむ。話はこれだけなんだ。何にもそれ以外

のことはない。老少善惡の人を簡ばない。何にも人間に注文せんのや。ただ「目を覚ましてくれ」これだけだ。本願に目を覚ませば、本願がその目を覚ました衆生の全身に入り満つるんだ。そしてその人間をですね、仏にになってしまうんだ。そういうところに、ただ信仰のみという言葉が符合するがごとく、法然、親鸞にあらわれた。これはかえって外国が証明してくれたんだ。こういうこともある。

そのことがですね、どうも法然上人では開かれたけれど、それがどうもよくわからん。わからんという意味は、わかるような教学になっていない。教学が足りない。法然上人の体験が足りないというのではない。法然上人は、念仏にすでに往生を決定されたんだからね。わかるようにするっていうことが教学だ。わかるようにするという意味はね、理屈に合うという意味じゃないですよ。理屈に合うようにするというじゃない。教学というものの非常な重要性は、法然上人が『大無量寿経』の選択本願を説かれたんだけど、その選択本願を明らかにする教学は、『観無量寿経』に依られたんですわ。そこにやっぱり教学の不十分な点がある。「偏依善導一師」と言って、善導に依られた。

『大無量寿経』選択本願の念仏の意義、教学ですね。念仏は教学を超えておるんだ。けれど、念仏の精神というものの、念仏というものの領解だね、教学と言うとやかましいんだろうけれど、その領解がないと、「南無妙法蓮華経」と変わらない。題目みたいになって、ただ唱えて、救われるという具合にね。そういうような、何か一つですね、それは念仏の気分で救われてしまうんだね。恍惚的なね。念仏三昧と言っても無我夢中の念仏と言って、恍惚の信仰になってしまう。教学がないと、念仏が恍惚状態だね。だから、念仏している間は恍惚で救われておるけれど、醒めたたんに、だめになる。元の木阿弥になる。念仏している間は救われているような気持ちだけれど、やめたとたんに元の木阿弥になる。そういう具合になっちゃって、どうもそこに自覚にならん。自覚というものは、これは一遍目が覚めたら、永遠に眠るわけにいかないものだ。眠りから醒めた人は、もうどんなにしても夢に混乱しないですわ。夢から醒めた人は、夢見ることはできない。なんかそういうものであってね、一遍醒めた人間が眠るということとはもう絶

対にない。だから逆なんで、わしは醒めとる醒めとる言っているのは、まだ夢見ている証拠だ。酒みたいなものだ。「もう君は相当飲んでるんじゃないか」と言う。「いやまだ大丈夫や、まだ序の口だ」というようなことを言う。あれはだいたい酔いが回ったところだ。そんなようなものであってね。

『観経』って言うのは、やっぱりこれは相対の教学だね。聖道に対して浄土と言う。聖道に相対して浄土と言うだけで、半分です。そういうものでは独立できない。本願がね、そういうことでは独立できない。だからむしろ下手をすると逆になっちゃって、念仏は、聖道門の行に耐えられないような、いずれの行も及びがたいような、そういう人間を救う為に念仏がある。だからして念仏というのは、聖道の行に耐えられない人間をやっぱり聖道に引き入れる為に念仏がある。だから念仏、浄土の教えというのは聖道の教えの方便なんだ。こういう具合に、逆へいってしまふんだ。そういうふうと考えてですね、浄土門の人々だけが念仏してたんじゃない。もう日本で近いところでは比叡山でも何でも、みんな一緒だ。天台宗の人も、それから法相宗の人もですね、みんな念仏しておったんだ。念仏を知らないんじゃない。けれど聖道の方便なんだ。善導がそこに出てきて、逆なんだと。聖道が浄土の方便なんだ。こういう具合に方向転換したんだ。だけど、どうもそこにね、うかうかすると逆になっちゃって、浄土が聖道の方便になりかねないんです。だから、法然上人の教えを受けた人で、また聖道に帰った人がいるんだ。法然門下でね。そういうのは昔話じゃない、今でもあるんじゃないか。聖道に帰るといふのは聖道の根性を捨てていないのや。そうすると、念仏に理屈をつけるんですわ。念仏というものは、単純なものじゃない、もっとこれは深いものだというようなことで、念仏に理屈をつける。理論だ。念仏というものを理論に変えてくる。その人はどういう人かというところ。理論で念仏を救おうとして、念仏に救われてはいはしない。だから腹の中では念仏をバカにしている。愚夫愚婦の道だと。その考え方が早や聖道の考え方です。

だから、真宗教学なんかでも、下手するんですね、もう根性は聖道になっているとことがある。やっぱり、そ

のために、そういうことがないために教学が必要なんだ。教学というのは理屈をつけることではない。理屈のいらない念仏というものを明らかにしていく。そうかと言って、理屈のないものは神秘的かというと、そうじゃない。神秘的なんじゃない。理屈のないってことは人間の理屈じゃないけれど、そこに如來の、如來の理屈というわけにはいかないけれど、人間の理屈というものはない時は、なんにもないただ一つの恍惚状態というものではない。そこにやっぱりこういうふうになんなんだ、自然だ。自然ということは必然と同じことなんです。自然必然だね。どっちでもいいというものじゃない、そうでなければならんというね。そこに大きな道理がある。念仏には、本願の道理というものがあ。自然の道理というものがあ。その道理に救われるんだ。ただありがたいという感情で救われるんじゃない。だからして理屈というものはいらんという意味は、ただ感情で救われるんだとなりそうだけど、理屈でだめなものは感情でもだめなのです。理屈は人間のものだけれども感情も人間のものだ。そうじゃなく、人間を超えた道理なんだ。本願の御はからいだ。理屈は我々のはからい。「御」という字がつくんだ。それに触れるんだ。道理に触れた時に自覚が成り立つんだ。道理のない感情なら自覚がない。ただの気分だ。

そういうところに教学というものはどうしても必要だけれども、今、言いましたように、法然上人もやっぱり「偏依善導一師」という。道綽禪師もあるじゃないかというわけなんだけれど、やっぱり善導は、三昧発得の聖者である。念仏三昧によって、仏を見たとき、こういうような体験をもたれた方だ。こういうようなことを、法然上人はやっぱり伝承して、尊敬しておられます。やっぱりそこに神秘主義がある。そういうような、教学として不完全なために、どうも念仏の中にまだ神秘主義という、念仏三昧が純粹でない。神秘主義は仏教の言葉で観仏三昧、やっぱり観仏三昧、神秘的体験というようなものの要素が残っている。そういうものがあると、その人の信仰は神秘的体験ということになってその人だけのものでしょう。「ちょっと聞かせてくれ」、「いやーなかなか言えない」というようなことを言ってますね。「わしの信仰は深いんだ」というようなことを言って、それは言えないんじゃないんだ。言えない

んだということだ。誤魔化しているだけの話です。そういうようにですね、人にはわからんけれどもあるというような、秘密だ。神秘体験、秘密の体験だ。つまり何かというと念仏が公開的でないんだ、公明正大でないんです。個人的な、私的な、そういうものが、その信仰体験、念仏の体験が私化されるんですね。私的になるというか、公にならない。私的なものを破って公にするのが教学の役目なんだ。教学が不完全だということとやっぱり私的なものが残るんだ。誰にもあるけど、特別な体験になる。特別という褒めていうだけけど、はや、すでに私化されている。特別というのはありはしないんだ。長いこと求道してきたからその人の念仏はしっかりしていると、昨日出かけてきたからまだ青二才だと、そんなことは念仏にはありはしない。

先輩と後輩、そういうようなですね、人間で区別されるというようなものは、人間の区別は念仏の世界には無用なんです。頭の悪い、どんな愚かな人間でもです。愚かでないんだという訳ではない。愚かというものに一向、無関係。愚かな人間が頷く。不思議なことですね。愚かな人間が頷いたその信念は、どんな賢い人の理論も負けるんです。愚かな人間が頷いたら、そういう理論というようなものに驚かない。その頷いた感動がね。頷かないから理屈をつけたくなる。役にも立たないです。また、感動ばかりという、アヘンの薬を注射してもらうようなもんだね。月に一回ずつやらなければいけない、注射が切れたら。すみません、もうちょっとありがたい感情を注射してくれというようなものだ。アヘンだ。それで何か信者をですね、目を覚ますのじゃない、眠らせるというものだ、有り難い感情で。みんな目を覚まらずに有難屋になっているのですわ。此の頃は薬にも公害ということがある。説教も公害だ。いい気持ちになって寝ているんだ、覚まさないで眠っちゃっている。こういうことがあるんです。やっぱりそういうことを聞けば聞く程、教学というものが大事なもんなんだ。教学に誤解があるんです。理屈をつけるのが教学だと思いませんか。立派な教学が『教行信証』というものです。これは念仏の教学や。念仏というものの教学というものを、完備されたのです。法然上人は念仏を出してこられたけれど、教学がない。不十分なんです。教学を完成したのが親鸞聖人

ですね。

（本稿は、岐阜慈光会主催の『入出二門偈』の会における昭和五十年八月七日午前の講義の筆録の前半を整理したものである。
文責 編集部）